融合研究の主なコラボレーション活動

令和２年度　全領域合同研究交流会

全領域合同研究交流会（以下、交流会）は、学際科学フロンティア研究所の教員の皆様と学際高等研究教育院の大学院生（以下、研究教育院生）とが一堂に会し、研究発表を行い、議論をすることで分野・領域の垣根を越えた交流を図る場です。平成26年度より始まった交流会は昨年度で７年目を終えました。本稿では交流会運営委員として、私見も交えつつ、オンラインでの開催という新たな試みに挑戦した令和２年度の交流会に関してご報告をさせていただきます。

1. オンラインでの交流会開催について

本年は後期から交流会が再開され、10月より全4回の交流会をオンラインにて開催いたしました。7月に行われた懇談会において委員として任命を受け、どのような形でオンライン交流会を実施するのか、先生方や前年度の運営委員の皆様と議論をしながら、話し合いを進めて参りました。より多くの研究教育院生に発表の機会を設けるため、例年通り1回の交流会においては、3件の口頭発表と10件程度のポスター発表を依頼することにいたしました。

どのオンラインツールを使用するかに関しては試行錯誤の連続でした。ポスター発表では同じ時間帯に複数のオンラインでのルームを用意する必要があること、また、誰にとってもわかりやすい参加方法であることを中心に据え、前半2回ではgoogle meetを使用いたしました。しかしながら、第2回を終え参加者の皆様にアンケートを実施した際、google meetでは、発表者は画面共有をすると参加者の顔が見えなくなるという、大きな欠点が見出されました。そこで、後半2回の交流会はZoomを使用しての開催に変更をいたしました。1つの部屋（URL）内で複数のルームを作ることができ、参加者も自由に行き来できますので、ホスト・ゲストともにストレスなく交流会に臨める点が強みだったのではないかと思います。現在ではオンラインでの学会発表も主流になっておりますので、今後、より使用しやすいツールが出てくることも期待できます。本年度以降もオンライン開催が続く場合には、ニーズに応じて使用するツールを臨機応変に変えていただければ良いかと思います。

2. 口頭発表

各発表あたり、質疑応答含め20分間の持ち時間としました。発表者には事前にスライドを提出してもらい、発表をより良くするため、當真先生をはじめとする学際研究フロンティア研究所の教員の皆様に添削をお願いいたしました。ご協力いただいた先生方に対し、この場をお借りして御礼申し上げます。また、口頭発表では時間が足りない場合にも十分に質疑を受けるため、一昨年度に引き続き、質疑応答に特化したクラウドサービス「slido」を導入しました。寄せられた質問は後日、発表者に送り、回答はメーリスにて参加者に共有しました。

3. ポスター発表

前半2回の交流会においては、1時間の中にコアタイムを設けず、時間内に自由にポスターを閲覧し質疑できるようにしました。一方、後半2回では20分間×3回の区切りを設け、それぞれの時間内にポスターの説明と質疑応答を完結してもらうよう発表者にお願いしました。これにより、人の流れを起こし、多くの人に複数のポスターを閲覧してもらえるようになりました。さらに後半2回では、ポスターを1枚にまとめるという制約をなくし、複数枚のスライドに分けても良いとしました。これは、1枚にまとめると字や図が小さくなってしまい、発表者による画面共有では、聴講者が細部まで読みづらいという欠点があったためです。

4. 現状の問題点と今後の交流会について

まず、オンライン開催に関しては長所と短所それぞれが感じられました。大きな長所は、特に研究室が青葉山にない研究教育院生は、参加がしやすくなった点です。移動に時間とお金がかかりませんので、これは良い点として挙げられます。しかしながら、期待するほど参加者は増えておらず、例年通りの参加者数となっていました。一方、短所としては、参加者同士の交流が十分に図れていないのではないか？という懸念が挙げられます。前年度までのような現地での開催ですと、実際に顔を見合わせ、時間の制限なく交流会後も議論を続けることは可能でしたし、そのハードルも低かったのではないかと思います。

今後の開催形式は不透明ですが、たとえオンラインであっても、参加者に有意義な会であると感じてもらうような工夫が必要であると感じます。一方で、交流会が有意義なものになるかということは、発表者・参加者である我々研究教育院生一人ひとりのモチベーション次第であるとも思います。限られた時間の中で、自分の知見をより広めるよう、前のめりな気持ちを持って積極的に学際交流を図っていくことが、何よりも重要なことだと思います。

最後になりますが、全領域合同研究交流会が良い形で続き、更なる発展をしていくことを望むとともに、昨年度、交流会の運営にご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

学際高等研究教育院 博士研究教育院生
令和２年度 交流会運営委員
生命・環境領域 生命科学研究科　丸岡 奈津美